

2006.04.21 残間里江子

「論点整理のイメージ」についての意見・提案

①今後の道路政策の理念・思想について

「昨今の道路政策に対する批判的世論はきちんと認識している」ということを前提にしつつも、それらの意見に過度に惑わされることなく、言うべきことはたとえ言いにくいことであってもはっきり言っていくという姿勢を貫くことを基本とする。

目下のところは、何をどう説明したところで「予算規模を増やしたいだけだろう」と言われるのがオチだと思うが、だからこそ「どんなに批判されてもやるべきことはやる」という断固たる態度が必要だと思う。世論に迎合してどっちつかずの意見を掲げたり、軸足がブレると、道路行政に対する信用はますます失墜することになるだろう。

その意味では、本提言は「プロフェッショナル」としての使命を全うすべく、不屈の精神で臨まなければならない。

また、経済を柱にした単純な「効率論」と、安全・安心に代表されるある種の「情緒論」をVS構造で対決させることなく、両論で採用すべきところは随時採用する視点も大事である。

②論点整理の構成（目次だて）について

1) 今、何が問題かを明示する

ここに記すのか、あるいはこの前に「はじめに」という形で記すのかはともかく、社会・経済情勢を論じたり分析したりする前に、前述したように「我々は（書き手は）『現行の道路政策に対して世論は批判的である』ということについて、しっかり認識しており、その上に立って本提言を書いている」ということを明言しておくべきであろう。相手に自分の意見を聞き入れて欲しいと思う時、相手が自分に対して抱いている否定的意見は、それが誤認や誤解、理不尽な意見であったとしても、少なくとも「言われていることに対して認識している」ことを相手に表明しないかぎり、議論はスタートしないと思う。その前提に立って、反論すべきことは反論し、反省すべきは反省していけばいいのである。（つまり「言

われていることは承知しています。しかし、そちらにも誤認があります。それは………」というアプローチ法)。相手の非難を無視し、何事もなかったかのように議論をスタートさせても説得力はなく、さらなる反発を生むだけだろう。

しかし他方、こうした極めて今日的なシーンを導入部とすることにより、本提言が刺激的でより多くの人の関心喚起にもつながると思う。

2) このあとで、「現在の社会・経済情勢」について記す。

これも「少子高齢化」というような通り一遍の「現状認識論」ではなく、少し前に時間を戻して、価値観の推移（変遷）を下敷きにしながら、「今の時代を（我々は）こういうふうに捉えている」という独自の視点で書く。

3) 続いて日本の「道路整備の歴史」を辿る。

価値観の推移を意識させながら「それではここで改めて日本の道路整備の歴史を辿ってみよう」という感じで、これまでの道路整備のおさらいをする。

今、問題になっていることはいつ頃、どんなところから始まったのかを検証しておく。

4) 次に「課題抽出と目指すべき方向性」（求められるサービス）を書く。

現状を認識・分析したあとで、社会に横たわる問題点（課題）を抽出し、道路整備事業と重ね合わせながら「どう導いて行くつもりでいるのか」を書く。

現在道路整備に寄せられている批判や非難を真摯に受け止め、反省すべきは反省し、誤解・誤認事項に対しては丁寧に正しておく。

「目指すべき方向性」は「こうあるべき」という一般論的な書き方ではなく、自分たちは「こうしたいのだ」という主義・主張（メッセージ）を明確にする。

5) そのためには具体的にどうすればいいのかの「展望」（進め方）を書く。

時代は今こんな風に流れていて、人々の関心や興味（価値観）はこうで、そのなかで我々道路行政を担当する者は『道路整備』という領域の中でこれが大きな問題だと認識しており、それを解決するためには、このようなところからこういう形でアプローチしていこうと思う。（いくべきだと考える）ということを書く。

6) 終わりに

「この先、道路行政はこういう精神でやっていく！」（所信表明——強いメッセージ）

あくまでも、国民と一体になっての推進。誠心誠意提言していることが解るような、メッセージ性の強い調子で終わることが大事。

③論点整理に盛り込むべき施策について

「道路整備事業」の現場で今何が起きていて、何が問題となっているのかを広く一般の人に伝えるためのコミュニケーション戦略の強化が必要である。国土交通省は「アカウンタビリティ」を標榜しているが、前述のように道路の領域は世論からの強い批判の対象になっているので、より細密なコミュニケーション戦略を練って、積極的に取り組んでいくべきであろう。

参考) 通常の企画書(クライアント攻略法)のレジュメは以下の道筋で書くのが一般的。

- 1) 「はじめに」(どんな視点でこれを書いているのか)
- 2) 「今、世の中は」(社会を俯瞰しての概況)
- 3) 「御社の抱える課題(問題点)分析」(クローズアップ)
- 4) 「解決法」(社会情勢と御社の問題点を重ね合わせてみて、大括りでどう考えればいいか。
与件整理をし、方向性を指し示す)
- 5) 「具体的解決法」(理想論を振りかざすのではなく、「出来ることしか出来ない」を基軸に、
予算、人材(陣容)、期限などを冷静に見極め、どこからどのような形で
スタートさせるかを時間軸に則って書き記す)